平成三十年度 群馬県立女子大学文学部国文学科 前期日程入学試験問題

国語

（一〇〇分）

（注意事項）

1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。

2 問題冊子は一冊（1頁から19頁）、解答用紙は二枚（問題一用紙と問題二用紙）あるので注意すること。

3 用紙の脱落や汚れに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせること。

4 試験開始直後に、各解答用紙の所定の箇所に受験番号と氏名を記入すること。

5 解答は、すべて解答用紙の解答欄内に記入すること。

問題一

（一〇〇点）

（一）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。筆者は科学絵本の作者で、作品に『しでむし』、『ぎふちょう』、『つちはんみょう』などがある。

「自然環境」との距離がはなれゆく一方の人の世の中だからなのか、虫が好きなことは、ときには変わり者だとか偏執的性質をもつ人であるとか、そんな印象を持たれることが多く、虫が嫌いという人の方が圧倒的に多いと肌で感じる。マスコミの伝え方が影響している部分もある。現代の人の生活では、野生生物と接触することが少なくなっているし、除菌を[a]スイショウする世の中では、虫は不潔の象徴のような存在でもあろう。

私は虫が嫌いな人に、虫を好きになってもらおうなどとは考えていない。虫と接触する機会のない人が、虫を嫌ったり排除しようとするのは自然なことだ。わからないから怖いのだし、私が「ナガゴマフカミキリ」と出会ったとき[注1]のように、正体不明の生物に危害を加えられないように自らの命を防衛するという意味でも、①それは当然の反応といえる。逆にそうした感受性がないことの方が恐ろしい。しかしその虫も、われわれに共通する「命」をもつものだ。好き嫌いはどちらでもいいとして、虫は命ではない、とは言えない。大人はそれをどのようにとらえ、どのように子どもに伝えたらよいのだろうか。

人工的な都市環境ではない「自然環境」は、はるか昔から私たちの生活資源だった。その自然環境は身近な草木や虫、ケモノたち、さらに目に見えない菌など多くの生き物が構成しており、私たちはずっと彼らと暮らしてきた。本来、私たちも自然環境の中で、バランスよく生命活動のやりとりをしていたはずだ。

人は、今の暮らしを維持するために、それ相応のことを考えて行動しているが、現代ではその考えの中に、②「自然環境」を人も含まれたものとして意識することは難しい状況にある。この世界は、虫を含めた多様な生きものの働きによって生態系の[b]キンコウを維持しており、私たち人もその働きや恩恵を受けなければ生存できない。自然環境

の中にある虫の暮らしを見ていると、彼らは完全に循環資源の一部になっていることに気が付く。一方で私たちの排泄物や死体などは循環資源として還元されず、食糧も一方的に自然環境を改変することで得ていたり、ふと気付くと生態系から切り離された暮らしをしている。生態系と関係をもたずに「見ているだけの側」になりきっているこの状況では、人は生態系の一員とは言えそうもない。地球で暮らしているのは人間だけではない。自然界で起こっているあらゆる命の出来事を、大人たちはしっかりとらえることができているだろうか。親は子どもの環境のひとつであり、子どもは親の意識の影響を大きく受けて育つ。実感としてつかみにくいことではあるが、「ただ見ている側」から一歩踏み込み、「私たちも含まれている生活の場としての自然環境」も意識しつつ今を考え、次世代のために働く必要があるように思う。

野生の生き物は多種多様で、そのすべてに、産まれて生きて死ぬ、というドラマがある。③虫は嫌われ者だが、ちょこまかと動き回る姿は人の肉眼でとらえやすく、姿も多彩で、嫌でも身近で意識される存在である。そうした生命力あふれる姿に恐怖を覚える人もいるし、興味を惹かれる人もいる。一方、その死体もよく目にしているはずだが、こちらに注意を払う人はあまりいない。虫がそこに死んでいるのだ。死んでいるということは、生きていたということである。どこかで産まれて、育ち、喰い、繁殖し、生き切って死んでそこにいる。すべての虫が成虫になれるわけではない。多くの虫が成虫になるまでに誰かに喰われたり事故にあったりして死んでいる。

たとえば『つちはんみょう』の主役のヒメツチハンミョウでは、メスの産んだ約四〇〇〇個の卵から孵った幼虫のうち、運よくヒメハナバチに寄生して成虫にまでなれるのはほんの数匹。他の赤ちゃんは皆死んでいる。ギフチョウは生涯にわたり、アリという天敵に狙われ続け、辛うじて蛹になっても、地べたで休眠している一〇カ月の間にネズミや鳥に喰われ、春に舞い飛ぶこの美しい蝶はその危機をくぐり抜けた幸運な者たちなのだ。『しでむし』のヨツボ

シモンシデムシは、ネズミなどの小型脊椎動物の死体を糧に安全に子育てをし、十数匹の子どもたちはほぼすべてが成虫になれる。しかし、死体という食糧資源は競争率が高く、成虫が死体にありつき繁殖できる確率はきわめて低い。ヨツボシモンシデムシは動物の死体と共にあり、死体がないと種を存続することができない。誰かが死んでくれなければ困るのだ。

人の世界では、今も疫病、飢饉、自然災害、戦争などで死が身近にある人たちがいる。私たちの国でも、二〇一一年の大震災で多くの犠牲者が出たばかりだ。そのとき私たちは、生きることに対して真摯に向き合ったはずだ。しかし、その気持ちを今も持っているだろうか。死がそこにあると意識することで、ようやく今自らが生きているということに気付きはしないか。

人と人以外の生物を同じように見ることは「社会生物学論争」[注2]にあるように危険なことであるが、単純に「産まれて生きて死ぬ」という点で、虫と人とは同じである。虫が産まれ、生きて死ぬさまは無垢で潔く、ユウカンだ。虫の生きざまをしつこく見ていると、自然と自分に重ね、私はこんな風に生きられるのかと考える。そしていつも、自分がいかにハンパで腰抜けで出来の悪い生きものなのかと思うに至る。一瞬一瞬を全力で生きる虫の生きざま、振る舞い、姿は、何よりも美しく見えるのだ。生き切って命を閉じた死にざまさえ尊く美しい。私たちが目にする虫は、④奇跡の末にそこにある生命の姿である。生きていることは当たり前ではないと、虫は私に伝えているように思うのだ。

虫を描くことで「生きる」というとてもシンプルなことを伝えられるのではないか。その描き方を探る日々の中で、虫と出会えたことが幸運なことだったと改めて感じている。何より、人間の「外」にある虫などの「自然物」の存在や振る舞いは私の予想をいつも超えている。だから単純に、虫を眺めることが面白いと感じるのだ。

わが家では薪ストーブを使っている。伐採も薪割りもやる。その際にテッポウムシ（カミキリムシやタマムシの幼虫）

が出てくる。以前であれば、どういう状態の何という木から出たかを観察し、成虫まで飼育して種を特定しようと考えた。テッポウムシが、昔から食用にされていることは知っていたが、気持ち悪いし食べようと思わなかった。しかしあるとき、年配の方の幼少期の話で「犬と取り合いになるほどおいしいものだ」と聞き、思い切って炒めて食べてみた。すると、これがうまかったのである。

虫は命だ、虫は美しいとさんざん言いながら、虫を食べたその瞬間から虫は私の中で「食糧」のひとつとして定着してしまった。どんなに珍しいカミキリであろうが、「うまそう！」という感情が先に立つようになってしまった。私にとって、虫はもはや科学の延長上だけにあるものではない。こんなに簡単に自分の認識が変わったことがe ツウカイでもある。今も薪割りをしているが、テッポウムシは楽しみのひとつになっているし、以後はその他の虫も食べるようになった。

不思議な感覚なのだが、虫を食べたことで、なぜか彼らの世界の仲間に入れてもらえたような気がした。また、虫の命が私の体の血肉になったということで、彼らとの関係がフェアになったような感覚にもなった。が、フェアではない。私は彼らと違い命がけで今日を生きてはいない。安定した豊かな食生活を送る贅沢者の戯れ言なのはわかっている。それでも、それまで感じていた⑤彼らとの距離が少し縮まったように思うのだ。

命は描けない。命は静止しているものではなく、状態であり、関係の中で、いつも運動し変化しているものであるから。姿を平面に描いてもそれは命ではない。

私にできるのは、断片を誠実に描くことくらい。その静止した断片の連なりが絵本であり、ページという静止と静止の狭間に、永遠に描くことのできない命のようなものが忍び込んでくれたらと願うのだ。

（舘野鴻「命は描けるか」による）

注1　これ以前の部分で筆者が幼稚園児の頃、初めて見た「ナガゴマフカミキリ」に恐怖を覚えたことが記されている。
注2　動物の社会的行動についての研究を人間行動の理解に適用しようとする考えが、人間倫理に対立して生じた論争のこと。

問1　傍線部①「それ」の指示内容を記しなさい。

問2　傍線部②「『自然環境』を人も含まれたものとして意識することは難しい」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問3　傍線部③「虫は嫌われ者だ」とあるが、「嫌われ者」であるのはなぜか。説明しなさい。

問4　傍線部④「奇跡の末にそこにある」とはどういうことか。説明しなさい。

問5　傍線部⑤「彼らとの距離が少し縮まったように思う」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問6　波線部a～eのカタカナを漢字で記しなさい。

（二）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二〇〇六年六月、修学旅行の列車内で、私は中也の詩集を開いた。中学三年の春だった。札幌から函館に向かう列車の中、トランプゲームの合間に、ザラ紙の詩集をめくる。トンネルの出入りで、①ページは白く発光しては陰りを帯びた。私は窓に身を寄せて、詩行の辿りやすい角度を探った。

現代詩を意識する以前から、中原中也の名は耳にしていた。太宰治（の作品というよりは太宰そのもの）に熱を上げていた同級生が、「中也！」と親しげにその名を呼んでいたからだ。ミーハーな文学少女だった私たちは、文豪を格好のアイドルに仕立て上げた。中也の少年性を帯びた中性的な肖像写真は、思春期の暴走しがちな憧憬に火をつけたのだった。

トンネルの暗がりの中、火花のように放たれる詩句。詩「サーカス」の〈茶色い戦争〉、詩「宿酔」の〈千の天使が／バスケットボールする。〉などは、一枚の絵画のごとく色鮮やかだった。

〈茶色い戦争〉は、その色合いと共に、『チョコレート戦争』というタイトルの児童小説を思い浮かべた。だから、私にとっての〈茶色い戦争〉は甘く、ほろ苦い後味を残す。

朝、鈍い日が照つてて
　風がある。
千の天使が
　バスケットボールする。

（「宿酔」抄『山羊の歌』）

バスケットボール？　体育の時間に飽きるほどやらされたあの粗野な球技が、これほど甘美なイメージを持つとは。日溜まりのなかで天使たちがボールのように戯れる様を想像した。まぶしい祝祭の光景に思えた。自分もお酒を飲むようになったら、千の天使のバスケットボールに加わりたい――。

もちろんそんな夢想は、当時の私の想像や思い込みに過ぎない。だが、そうした軽やかな憧憬を持って詩に出会ったという事実は、詩人となった今も忘れないでおきたい。実際、このときは現代詩と近代詩の違いもわかっておらず、自分の書く詩の地続きにあるものとして、中也の詩を手に取っていたように思う。

「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」と小さく口ずさむと、隣席の女友達が復唱して、くすりと笑う。呪文のような不可思議な擬音に、忘れられない感触が残った。②映像的な比喩表現とは感触が異なり、音そのものが生きもののごとく独立して感じられた。

何より驚いたのは、中也が自らの死さえも徹底して突き放し、悲哀とユーモアを込めて詩に描くことだった。〈ホラホラ、これが僕の骨――／見てゐるのは僕？　可笑しなことだ。〉（「骨」）。

自身のやりきれない感情や情けなさに深く没入しているようでいて、はっきりとした距離がある。没入と俯瞰のバランスが絶妙であった。中也の詩作者としての姿勢は、詩を書き始めて間もない私のお手本となった。

「これが〈詩の表現にする〉ということなのか」。当時の私は、学校生活の中で感じる違和感、息苦しさを言葉にしてぶつけていた。けれど感情を吐露することと、それを表現に昇華させることの間には、大きな隔たりがある。③ただ書くばかりではなく、強度を持った表現として残すためには、④特殊な変換装置が必要なのだ。その変換の手触りを、中也の詩に触れながら、確かめていった。

⑤中也の詩には、ときに死の気配がつきまとう。そこに射し込む月の光も鮮烈である。〈私の頭の中には、いつの頃

からか、／薄命さうなピエロがひとり棲んでゐて、／それは、紗の服かなんかを着込んで、／そして月光を浴びてゐるのでした。〉（「幻影」）、〈月の光が照つてゐた／月の光が照つてゐた／／お庭の隅の草叢に／隠れてゐるのは死んだ児だ〉（「月の光　その一」）、〈月夜の晩に、拾つたボタンは／どうしてそれが、捨てられようか？〉（「月夜の浜辺」）。

中也にとって〈死〉は無の暗闇ではない。闇を仄かに照らす月光の中、繰り返し発見される存在のようだ。そのイメージは虚無や喪失感を超えて、はかない夢のような印象すら与える。

一昨年、作家の稲葉真弓さんのエッセイ集『少し湿った場所』（幻戯書房）を開いた。私は、亡くなった稲葉さんの生前の足跡を辿ろうとしていた。

稲葉さんは、飼い猫の死後、愛猫の思い出を、中也の詩「また来ん春……」と重ね合わせたという。

また来ん春と人は云ふ
しかし私は辛いのだ
春が来たつて何になる
あの子が返つて来るぢやない

おもへば今年の五月には
おまへを抱いて動物園
象を見せても猫といひ
鳥を見せても猫だつた

（「また来ん春……」抄『在りし日の歌』）

中也が、亡き息子に呼びかけるように綴った本作。中学生のときの私は読み流していた作品だった。幼い息子を失い、悲嘆に暮れる中也と、愛猫を思い続ける作家と、作家の魂に迫ろうとする私と――。詩のことばによって、それらは一線で結ばれていった。「死」は世界との断絶ではない。⑥「死」の先にも、その人の時間は流れているのだ。中也の詩は、終わりの後の続きを見せてくれる。そして、私はその「続き」にこそ興味を掻き立てられる。

なんにも訪ふことのない、
私の心は閑寂だ。

（「閑寂」抄『在りし日の歌』）

何者にも侵されることのない確かな閑寂。中也の詩と出会った十四歳の私は、心に自分のための閑寂の空間を得た。そこでひっそりと巣をつくるように、自分の詩を温めはじめたのだ。

（文月悠光「閑寂の心で」による）

問1　傍線部①「ページは白く発光しては陰りを帯びた」とはどのような状況か。説明しなさい。

問2　傍線部②「映像的な比喩表現」の具体例として最も適切であると思われるものを本文中から抜き出して記しなさい。

問3　傍線部③「ただ書くばかり」とはどういうことか。文脈に即して説明しなさい。

問4　傍線部④「特殊な変換装置」とはどのようなものか。中也の詩のあり方を踏まえて説明しなさい。

問5　傍線部⑤「中也の詩には、ときに死の気配がつきまとう。そこに射し込む月の光も鮮烈である」とあるが、「死の気配」と「月の光」の関係を筆者はどう捉えているか。説明しなさい。

問6　傍線部⑥「『死』の先にも、その人の時間は流れている」とはどういうことか。説明しなさい。

問題二

（一〇〇点）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔これまでのあらすじ〕　ある女君が早くに母をなくし、父中納言の邸で血のつながらないその妻北の方や異母兄弟姉妹たちと暮らしていた。女君は北の方から虐げられていたが、あるとき少将道頼が見初め、ひそかに通う仲となる。北の方が女君に急ぎの縫物をさせようとよこした夜も、じつは少将が女君の部屋を訪れていた。少将の脱ぎ捨てた衣を北の方に見られ、侍女あこぎがとっさの機知で他から頼まれた縫物であるとごまかすと、北の方は立腹しながら去るが、その様子を憎んで少将は女君にすぐには縫わせようとしない。

ア暗うなりぬれば、格子おろさせて、灯台に灯をともさせて、いかで縫ひ出でむと思ふほどに、北の方、「縫ふや」と見にイみそかにいましにけり。見たまへば、縫物はうち散らして、灯はともして、人[注1]もなし。「入り臥しにけり」と思ふに、大きに腹立ちて、「おとどこそ[注2]。この落窪の君、心の愛敬なく見わづらひぬれ。これいましてのたまへ。かくばかり急ぐものを。いづこなりし几帳にかあらむ、持ち[注3]しらぬもの設けて、ついたてて、入り臥し入り臥しすることよ」とaのたまへば、おとどは、「近くおはしてのたまへ」とのたまへば、ウいらへ遠くなりぬれば、はての言葉は聞こえず。少将、「落窪の君」とは聞かざりければ、「何の名ぞ、落窪」とb言へば、女いみじく恥づかしくて、エ「いさ」といらふ。「人の名にいかにつけたるぞ。論なう屈したる人の名ならむ。きらきらしからぬ人の名なり。北の方さいなみだちにたり。さがなくぞおはすべき」とc言ひ臥したまひけり。

袍裁ちておこせたり。「またおそくも縫ふぞ」と思して、よろづのこと、おとどにd聞こえて、「行きてのたまへ、のたまへ」と責められて、eおはして、遣戸を引きあけたまふよりのたまふやう、「いなや、この落窪の君の、あなたにのたまふことに従はず、あしかんなるはなぞ。親なかんめれば、オいかでよろしく思はれにしがなとこそ思はめ。

かばかり急ぐに、外(ほか)のものを縫ひて、ここのものに手触れざらむや、何(なに)の心ぞ」とて、「夜(よ)のうちに、縫ひ出ださずは、子とも見えじ」とのたまへば、女、いらへもせで、つぶつぶと泣きぬ。おとど、さ言ひかけて帰りたまひぬ。

人の聞くに恥づかしく、恥の限り言はれ、言ひつる名を我と聞かれぬることと思ふに、(カ)ただ今死ぬるものにもがなと、縫物はしばしおしやりて、灯の暗き方に向きて、いみじう泣けば、少将、あはれにことわりにて、「いかに、げに、恥づかしと思ふらむ」と我もうち泣きて、「しばし入りて臥したまへれ」とて、せめてひき入れたまひて、よろづに言ひ慰めたまふ。

落窪の君とはこの人の名を言ひけるなりけり、(キ)我言ひつることいかに恥づかしと思ふらむ、といとほし。「(ク)継母(まま)こそあらめ、中納言さへ憎く言ひつるかな。いといみじう思ひたるにこそあめれ。いかで、よくて見せてしがな」と心のうちに思ほす。

（『落窪物語』より）

注1　人もなし　…女君は几帳の向こうの寝所の方にいて見えないので、このようにいう。

注2　おとどこそ　…「おとど」は女君の父である中納言のこと。「こそ」は呼びかけることば。

注3　持ちしらぬもの　…持ったことのないもの。持っていても使い方をしらないもの。

問1　二重傍線部「いといみじう思ひたるにこそあめれ」を例にならって品詞分解しなさい。

【例】

にはかに	宮	へ	渡ら	せ	たまふ	べか	なる	を
形容動詞・連用形	名詞	助詞	動詞・未然形	助動詞・尊敬・連用形	補助動詞・終止形	助動詞・推量・連体形（撥音便無表記）	助動詞・伝聞・連体形	助詞

問2　点線部a～eの主語をそれぞれ答えなさい。

問3　傍線部ア「暗うなりぬれば」、イ「みそかにいましにけり」、カ「ただ今死ぬるものにもがな」を現代語訳しなさい。

問4　傍線部ウ「いらへ遠くなりぬれば、はての言葉は聞こえず」とあるが、どういうことか。簡潔に説明しなさい。

問5　傍線部エ「『いさ』といらふ」とあるが、なぜ「いさ」と答えたのか。その理由を分かりやすく説明しなさい。

問6　傍線部オ「いかでよろしく思はれにしがなとこそ思はめ」を現代語訳しなさい。

問7　傍線部キ「我言ひつることといかに恥づかしと思ふらむ、といとほし」とあるが、これについて次の各問に答えなさい。

（1）「我言ひつること」に当たる部分を探し、その最初の五字を記しなさい。（句読点も字数に含む。）

（2）なぜ「いとほし」と思ったのか。その理由を分かりやすく説明しなさい。

問8　傍線部ク「継母（ままこ）そあらめ、中納言さへ憎く言ひつるかな」とあるが、このことばからは少将のどのような心情がうかがわれるか。傍線部のことばに即して簡潔に説明しなさい。